

北海道師範塾 「教師の道」 塾頭通信

第510号 平成25年3月14日

THE SHOES OF FISHERMAN (漁師の靴)

2月28日、ローマ法王ベネディクト16世は、85歳という高齢を理由に退位されました。ローマ法王は実質的に終身制ですから、存命中の退位は1415年のグレゴリウス12世以来約600年ぶりとの事になります。

ローマ法王退位のニュースは世界を驚かせるには十分でした。ベネディクト16世の退位に関して、アメリカのオバマ大統領は「私はこの4年間、教皇と共に仕事をする事が出来て感謝している」と述べています。イギリスのキャメロン首相も「彼はイギリスとの関係を強化する為に疲れを知らず働いて来ました」と述べていますが、これらの発言は、ローマ法王が宗教指導者としてだけでなく現実世界に対しても大きな影響力を持っている事を良く表していると思います。

ローマ法王が元首であるバチカン市国は世界で最も小さな国家に過ぎませんが、約12億人ともいわれるカトリック教徒の総本山であり、彼ら信徒の精神的な支柱、それがローマ法王の存在です。

初代のローマ法王はイエス・キリストに従った12使徒の一人ペトロという人でした。

彼は、イエスの弟子になる前は漁師を営んでいたのですが、ある日イエスから「わたしについて来なさい。人間をとる漁師にしよう」と誘いを受け弟子になりました(マタイ伝)。

歴代の「教皇の指輪」には聖ペテロが漁をする姿を彫り込まれているそうですが、その指輪を受け継ぐ人こそペテロの後継者であり、ペテロの靴(THE SHOES OF FISHERMAN)を履く人といわれる所以です。

ローマ法王は、カトリック教会の頂点に立つ聖職者として、毎週日曜日バチカン宮殿からサンピエトロ広場に向かって「正午の祈り」を捧げ、毎週水曜日にはサンピエトロ広場で一般謁見を司っています。また、世界の人々に向かって多くのメッセージを発出しています。更に法王は、国家元首として外国要人と会談し、法王庁の案件処理にも当たるといのように、我々下々の者の想像を超える激務をこなしておられ、心身に与える負担も非常に大きいと拝察されます。

また、バチカンでは昨年、内部文書が流出して世間を騒がせましたし、世界各地で聖職者による未成年者への性的虐待が発覚するなど数々のスキャンダルにまみれ

てしまいました。

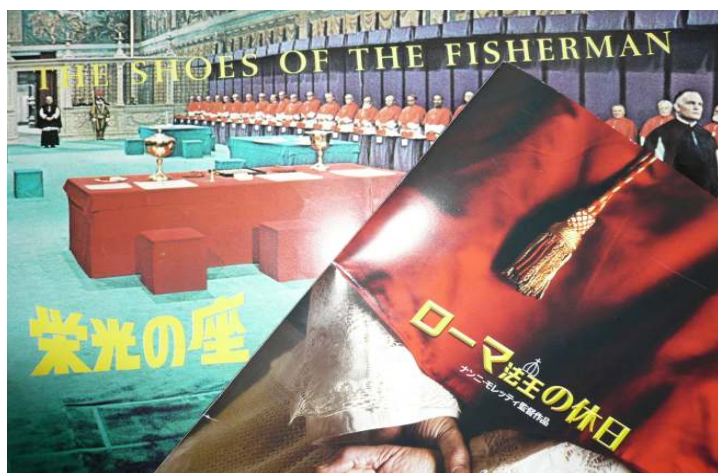
こうした中で、ベネディクト16世が、85歳という高齢の身で職責を全うする事が難しいと判断されたのは、止むを得ない仕儀であったと思います。

ベネディクト16世退位のニュースを見て、私は直ぐに、昨年公開された「ローマ法王の休日（原題は、Habemus Papan）」という映画を思い出しました。

この「ローマ法王の休日」という映画は、法王が亡くなって、次の法王を決める選挙会（コンクラベ）が行われることになり、投票が繰り返された結果選ばれたのはいつも謙虚で控え目なメルヴィルでした。映画では、みんな法王にはなりたくないものだから、一番おとなしいメルヴィルに法王の座を押し付けたように、私には見えました。

広場に集う群衆に向かってカトリック教徒への祝福の演説を行う、これが新法王の最初の仕事であり、担当の枢機卿が広場を見下ろすバルコニーに出て「我等の法王です」と呼びかけた瞬間、民衆の大歓声が沸きあがります。それを聞いたメルヴィルは「私にはとても無理だ」とその場を逃げ出してしまいます。結局彼は、法王の座に就くことなくバチカンを去るという決断をする事になります。

この映画を見た時、これは随分荒唐無稽な映画だと思いましたが、ベネディクト16世が、高齢の身で職責をまっとう出来ないという理由で退位するという話しを聞いて、法王の座には座りたくないと思う人がいてもおかしくはないと、今は感じています。



ベネディクト16世の退位のニュースを見て、私はもう一つの映画を思い出しています。それは今から50年近く前に見た「栄光の座（原題は、THE SHOES OF FISHERMAN、1969年日本公開）」という映画です。

この映画は、第3次世界大戦の危機が深まる中、20年間シベリアの強制労働キャンプで生活していた一人の男（かつてソ連で枢機卿を勤めていた）がある日突然釈放され、ローマに送られて枢機卿となり、輿望を担って瞬く間に法王の位につきまします。そして、ソ連首相の要望に答えてバチカンの総力を上げて第3次世界大戦と

人類滅亡の危機防止に努めるという壮大なドラマです。様々な困難、厳しい局面を、篤い信仰心と揺るがぬ決断力によって乗り越えようとする姿を描きながら、ローマ法王の座が単に華やかな栄光の座ではない事を伝えようとしたのかも知れません。

コンクラーベの様子や法王の戴冠式などは壮麗な絵巻物を見ている様で圧巻でしたが、それ以上にこの映画には、冷戦下で世情はまだまだ不安定な中、当時8億人ともいわれたカトリック信者を束ねる法王が世界平和に貢献していく事への期待が描かれていたように感じています。

21世紀に入り世界はグローバル化し、科学技術はますます発展していますが、しかし、世界がどう変わろうと、科学が如何に発達しようと、人々の心を支える上で宗教の力が小さくなる事はないでしょう。

地球上では、今なお、正義の名の下に絶え間なく紛争が続いており、多くの人々の血が流されています。こうした中、新たに誕生するローマ法王が、かつて如何なる人もなし得なかった人類の和解と地球の平和に貢献されることを期待したいと思います。

バチカンでは、コンクラーベが始まりました。コンクラーベに参加できるのは世界の80歳未満の枢機卿で、参加資格を持つのは117人といわれています。報道では有力な候補の名が上がっているようですが、今彼らの胸中は如何なるものでしょうか。もしも、アジアやアフリカから新法王が誕生したら画期的です。

投票の結果新法王が選ばれると、礼拝堂の煙突から白い煙が立ち上がる事になっていますが、1回目のコンクラーベの結果は黒い煙でした。

世界の目が、礼拝堂の小さな煙突に注がれています。(塾頭：吉田 洋一)